蘭　三十

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

りんの声はこれやこの人のよはにたまてしく
ふみつきてしろき浦は船人なやてかし
さこ廿の人の心をもりあらて浦あ代
ありそれは浦ともまりの浦らひとつ廿て
世よりおもり色へあれてもおもひ中ぎて女
御しるくしに一つ廿てたしたまつりて我身は
うてけりぬ時さ浦にとては浦うた廿て世に
わらいらも世ありたる人てもくあさ魚おす
見えて魚おろ沢田はいこて人のへぬる浦
みしとこ二廿をそ乃たまふあるへしこうくに

000583940 2

東京大学総合図書館

作事て庭をこのみて花をあいめ人の我身の
程をしらず栄耀を好みあまつさへ物を好く
なり思ひ分かれ人の善悪を申しはかりて
人のありさまを見て返す事ある物ある時は
此身の上の見苦しさをもせさせていかなる
つみをおそれて大勢の人の物よそへ人の
見苦しき事ありて所の老若の口の
物として老人の咎は意を得けるか事
事なりそれて見苦しけれどもや事の恥を忘れて
ままにあれ程はみえしかなしき

身しうしの事しれあるさ極りてをしての事
事せし人をうち入りてもその人の身のうちと
せしに我身のほしきまゝに物好きにし
取りあはをもは物として人の物の事さ取るべき
して人の善悪の事をも事ともにおほせまぎらはす
おまおもねりてもてなしそれしらず事をつ
うけもとれしとして世をさ作りてにしくろ
うし事にあさきうつつ我を極めて西は
何事をうたて身をかくあそしきそで見
事なんとかの人をきてあり極と折かみあて

冬重の宮は紀伊の守の事をうち見
いつしかの御簾は折りしうちしほれ八重菊
ほかりのみならふしくなりし夢にはうら花
まことは御いかりけりて今宵色まさしく御さ
ちいさけるやうにしてまやさしくおさなけれは
おまへなるへうらみをはなえてまつり
宰相の中将しおもしろき花の御簾やかれ
ありしすさそ見はまれ給ひ心てみれ
陸奥しけ春よりにくおりしかうもし浦
花よせきこて御室居にてあはれなるに恋しき武蔵

西はとてうらなみの浦うしみらへしなくはなかり
くりとて宮にひきんてうして我も庄き
ちりとて今はしかの人命たく我そ行りぬり
君の供せよとこそてゆうりせんて浦の母
まてやそこ此君のうち宰府中藤たる宮かり
法皇なれはさとも手の物くさやこゝ花のうち参
さてもあそほし宮ひめらくしき川
りし参つ見てたゝ此御身の行の朝
かいちりくりて恋しきほいましてうら
もとおほしとちてきてあへうちし浩ち

かゝしあつめたるものとみえたるや心人をおほせたに
しけんしとなりしうしけむなりとみなよりつ
やかひまてならし歌の道かはきてなくはきこえい
うち次いて歌をむかしとおもひていかなりけ
むかし今のよみはしのをたはてあらたに
よみかへし人の歌の次まさに給はりてきこて
いにしへをまさりなき心ひとつもちの人にてあに
しとのつ見えし中かくのことくに古こ
おもひにたてたることはなくしこうかはりけ
事の葉やかた歌をなつかしむあはれのこと

けるにいにしへの心を知りてたちかへりまきて
ねまつりにも心のかねにてすゑのもとの
りて歌よむ人の心のひまにて御あとのすゑの月
名はぬもしのかにあはれを目にかなしきうた
はりいまのいまに十三日につけてあはれにけるの
ぬせいにこそしにしもかゝにいはれてはいし
なかくを関しきこえはいうかひもなくしをに
うたにやなりけんこれやかくかくとくにそれ
まつ此たきみつかうのかちつ歌よみ人
あまねくもてなし世はいまも事のうちなりき

いとらうたけなり中将とても出たちはしまし給
ふむこそあかうたまのひかりなる給ひて清く
ゆかしくなりにしかは若君もて侍らんとはいと給ふ
名付る物なれはこと姫君うちとて人の心はその中の
御事なれは見る者るにこそ侍るこれ思ひつゝ
うつの色めくいえこそ思ひたまふ御し
けるとのまへ何ともえおひ母まへのこゝ
みは御してともうて思ひ参らせ給ひ孫と
此色こそ御事を物数なりつゝに参らせと
いまいりもの物語なり若き此年共らけ

なりけれは法つかさに参らせたり給ふ
にの花をしきのさまつりなるをみもの
こらり給ひまてまて思ひ給ひ奉る給ふ
なりとて二月には十日をそめてまゐりけ
まひうは今ありわなとてそ心なりける神
を引こゝろしけり
若君の御房より宮つかへ老けれは御家い
らゆゑよろこひ給ひてみちのをそれとも
ことに河内なるかうまて見えたりかなたし
とゆくらんさみ給母やまひさきに参る

らかのまえらけ若殿への御方へいらせ給ひて
さしもやむごとなき人々若の御前にさしまゐりて侍り
あまたさぶらふにいとゞこの殿へはまゐりておはします
御身ももちゐさせ給ふにいかにまさりてさらに御前へ
とうこんの身のうへつれづれにもやらうと思ひけるに
思ひにしづみてわが御身へ心ばへのふかき事の
にほひやかにおはしまして袖のうへのかはりをいそぎ給ひて
さうらふ若中へおはしましてまゐる事のさうらふ
いみじうおぼし侍るにていかにうれしく思ひこそ
おもひなしまゐらせてこそいまだ中将の御ことは

世の中しをりきや人の色までもかはりて侍り
色も月にてくもりそめいとおもふ思ひの袖にまさる
しかるに御侍りあひ事なかりし昔はおもひいさい海
ちくさにはげしうにしきはなかれの袖
たのみまそてかくりともぬれのまて若人をまたかた
すいさこやかくおもひて答へ夢のうちにおもひ
しいさけよるこそをもやうち若と言へ
せめぬかおもふとおもかれと今まではかなく
わすれかんの若ごまでく花よりしも
りかしおはいまいかとも見ひ草きくのみ

東京大学総合図書館

あやまちし生涯しまたあのみちはせんかたなき
きさきかゝりし侍らんとそれらは流れおそれ侍りきこえて
ひとゝせ海はしけまてゝ侍りうらやましうて
すゝそゝりさてあひあまりいて侍るうちに
あまきそてしらぬ中くおもしらいそてけっ
ほとゝちあれしきうみてかれいは海をたこう志をきて
哉ほし御宮ひてりか計るときくてそて
しはのかれかおほんまつ年は絶えはかれんに
おそにゝきゝへてたゝ尾をとらひ次ひて以前か
海ゝりあま生いそあひ涼さ法をかてきて

給ふ宮にはゝ人のまゐりまつりたる梅色やまさに給はに
らんと思ひするも色くふかきに大原野行給
年にそ無我見人ありていとほそくわか給
と思ひまつりける人はのかみにとまりく
いえしか宮つ人のまちいとひを解きて在井の
しるすかきさいたしまゐりて柳せしかとのいまた
人の波いはゝらふつまかいとおもしろんなる
かくくまひ気をちにくおほしあさき
ての尾をとき気にはしとかくたちひ給へ
いえし気程はしおりたまのかくくら

まひ無念ともし申ハかくうちハ侍らさらんや
ちくいさ様へも了おもひ人にもかたるとハ思ほす
ねとらハ御宮にはしめて物かたりするに人々は
さ滝ハ此ほとを侍て滝にもしてくる侍けるかし
あらくいとも打しつるもきこたる滝の侍とかくれ
くしうト猶滝ハりうしやのうちにとめま
しわらにとも大将へしそのほとけらしもまし
きつく第侍にのかたりをさをさ侍るを
女房人のうちとも打つかたもへくる侍くしに
のきれりけれとも君乃御まへにいとはき

これも遠く侍りしかハ色ほうに見て山里にやすみ
ゐきてて見おもひけるさきて遠く侍りしを
かくらみちちききすきて人ちくいふ事りを川
見しうのたひる沢人さ滝ハ君乃此ほとそ
いとわりわて滝ちりしう船ままいふすら
わさく侍ともにりうちりあやまらすへしう
ちまくしてあらひ人々をうへくハ君にて也
ひさらしかたちうくらさくし見物のおほ
やけこのいむお母うしろ侍るをえかくう
とく色の様の世たまひ此色おほく見ゆるま
し

なとかそきまち梅沢兵衛の見えけれは
年ひさしくてけることきこて何を語りふるの世
何とも何の海にふれそ人へいやなるものおほし
もさやうにさむらひ兵衛と大ねなるやうにてまさ
いかにて御海のたよりよ宗兵衛もたらう
ありふるもいへさせたまひふると申あひ給へは
さらなるていふかくいとあはれなることかぎり
見るやいなや我もいかれふりと申て御色ありせ
しそくなるもとおほされんまゝに花くさそん
母は三河まで参りし兵衛は何のなきてと思ふ

てまくらのかほくせそのかみにゆめをみんとすれは
何の御兵衛事なりとの給ひくらうねまされ
むかしの御ゆんとなる兵衛としたるを取ての御
なにいえをそれ父ちの粗末にいれてなりし給ひて
まそてらくれつゝにおはそその宮にへ
何ともかへせさせんとおほし兵衛にいふと
かしも兵衛となりあらはよりかと申さしぬ
たゝかの人の方より給ふありしとはさんとおぼして
兵衛の御わらはきこてまへい事にさらまいらんと
いとおもしろくていと御心よく兵衛は〜にまいる

しりそましひとつの程にてより事の心見へ合ふまし
おほりくし、浦辺の、つくし、川つくしにつ事とく
もあるはあるまじきりをしくきなりやとワるし、
事ききつら流やうなる様とけれるとするしいにはかる
うれとしゝ流りや色そて人のおりとなる事く
おもしろおもしろ川の色をおもしろしいと様ちの事をおり
ちれしの浦しの外哥この事有宮の外人ずなん
みちぬは事流やうれの浦ゝときされいとおもふ
え哥りしいひとをもおりしやうまふ、宗のみてと
むして流事くおほさつりくて此事くらあ哉まし

ね卯月とては海のり語りしも事は海のて侍こける
うし十月とりの比程はやふくせさらのみえ
色こそおもしろき事る哉出てる人いと取て
くはとくちれにうらに此のきいれは色を世の
よみすけ哉世をわもしろへとよしめりて此とせん
ますうけるそ此事な程いくわかりとおもふく
いらん海中程に中くらにちく、いるはあさらん
とく言海に事りありきて、いと様もほとにふ
花ほと色三線に思ひおもひのうつらきさ浦北
流井そうしおり哥語ふ海には色をうちてく

東京大学総合図書館

たゞうたにとていきてこそ御せうそこ申さく
とそ申し御つかひの御たちのかへりたまふに
えさりいてす宮つかへのほともめてう許こそおほけ
しかるを思ふさま中将の御心をさして
ことに此年の秋人々ににほふらへ前栽の色
うかひ人につたへしたまひ思ふにふかくそれ
なりけれはこれにてもまたこのあはれなる月の
世をうきことに思ひしらるれはまた月の
あはれ秋の野のゝ草にうつろひかはる花の
見て涙をもよほしつゝ秋をそめ給ふこと

おもふへのかんなきの御まへありときこえ侍りけり
きこえしほとにもいつしかけふは御申たし
大宰相の前しくきこえてかへしなかにかゝる
えしく関白まつらは人つてならぬ世をうらむこに
こそいはれ侍らぬといひはなちてはいひそへてきこえて
さす御侍らんとはゆるさせ給はす猶侍らんとき
出しぬるまて侍る事いかにもやことはりの中
御まへにてのをしうおほえたる南へとまうつるとて
かくとゝもに東のなとりをとゝめたり
えんとすこしいたう御前ははれて日出たる

あるときちかき御前にて侍従は姿いたくやつれて
みえ侍りてうへもいかにとおほしめしけるに
うちなけき侍従は御まへにうらみきこえて
いかにもありなんやとおほしめしたる御ありさま
のほとはいかはかりとて世にすみわひて
なからへ侍りとそおもふなり世をそむき
なん身をかくしはてなんとおもひて次
いとやさしきことのなけきおほしけるに姿の
いみしくあはれにて御なけきのほとも
と何となく人のなけきけるをそ侍りて
ぬ

よはひいと心ほそくて、はかなくなりたまふ
てさりけれはなけきて、みえけるそ
いとやさしくて[illegible]かなしき
をいとをしくおもひけるに、いよいよ
かなしみつゝなけきけるにも、はや
あはれにておもひけるに、なけきの
からくてそのさまにはなれて、いたはしく
うちかへしいかにもやさしくあはれにて
なりたまひておもひやられて、うちなけく
うち見ていよいよおもひけるにいたましとて

寿出し侍人々人の世にかく事のなくや侍るや
ちとら侍らぬ秋に六年の後のはじめつかたを
寿一ておぼつかな侍るもの心もとなく寿出ておぼ
ほくすんで寿しらしくよろこびて寿一にて皆様
歯をあへくこくよろこびの川はした出なり
いなせ山物の寿ながらいふ事なし心をそへて
ゐたらに当ときまうし心もとなき世話ならずと
ことも人皆入中りの次
聞きし事の後とは志ていなせ山なとくし
なう我し梅見んしはるかの世あり事心え

はじめはうりし何年ありしけりは寿像ある
といふおぼろ代をけふの世継のいへき出て
歯をあてにも見えそのはじめの事ををしと
見てなおありしこえし（本ノママ）は十くのそいくこまて
とてまうし出まで十月に歯明く侍る人々
寄もほしえんなる心て寿しくしてうえなき
はかなきしむなく此事の中のすこしのこの
歯しう枕しけるの宰相中将の君なりけ
なひあいさうの世継を孫と出まて申し
落に侍そうはすまでひとりなんて口寿

今は何をかつゝみ申事をかくし候べく
あまり大臣殿こそ中将と申し右大臣の時に
しよし玉ひとつ取られ候ひしをとりかへさんとて
この浦に下り給ひし時ひとりの海士と
契りをこめ給ひて若君御誕生ありて其海士は
かの玉をとらんとて身をすてゝかの玉を
とりかへし給ひしとてかくれさせ給ひしなり
その御子こそ御身にてましませとて
此大臣は龍宮の玉をとり給ひ御母はかくれ給ひて

かくしけるほどにほどをおいてまかりて
何とつゝみおぼしめして房前と申すなり
年もすぎて廿二三のほどにおよびて
夢に母の御姿の宮にあらはれ給ひて年
のほどもはるかのこの浦にいでゝ行きて
あまのすみかを見給ひて御母にあひ
とぶらひたまはんとて房前は
都をいでさせ給ひて此浦の所をたづね
大臣殿は御なげきありてまつ事はなし
あまり(に)御心をいためさせ給ひける

さ海松らハこしう公を係てありきまつひくら
外れくいまて大殿もくもたけ乃南海
大内すりまんれとく宮つ人をもひそれ
うらくの名と友さ給ふしきをとりし
河まいとりきつてさて大家やまりも弟乃
ことしかれてりいさうハあるも浦のさの花や
大御乞りたハすえの比都らく外なりとよ
勢たる浦ふ船に付きにてめりあるの霧を
ちにてまえんかる河しておいのこて給
かりくの味つしうこうてひきうけるとも

てまつる御文にてを見れハむとも船くらくそこ
きこえゆるけりいきてあまうふ大殿のを御せ何れ
なのこてしも通わこてみなく夫ともそ公候
あり

千船くハいとゆしとせて生月ある命を
うれ浦ほとこえ船大月あまけとわかれこそ
ゆひとかうきてあふ竜なり無乃の宮から
たい梅ひと夫ありいきこんこうあれを
朝日のもて玉なりをみそて玉の葉を
け外家に香ふすきあらめんおかりきまり

さてはむかしのことにてあるなるへしといふ
なとし草むらさきの露にそほちてさすまて
ましなるものをいさかひおもへる人なれは
とし志るしたる宮のたけ兵衛佐はむかしの
とある世のうちとさしかしもこれにてつたへ
まかりけれは君かたは松のかはりてよろし
ある時いさゝかしまいりてよけれは草のいろ
おもしろく見たる草なく
まんとおもふなりてもよし御からにたなれ
けふく住かさなりさけてはむまへ色あひて

さくなり人のいふやう中将のおほゆるさまの
御ともにまかりてけふは夜宮のつらのいつ
おかしかりける年は侍従のかたらへ
ところにてひとりにいふなれは御朝
なく霜かれのまへい草川かのよりける
かつてよみしは紀有常のいふなるきこえ
あつまへきさきてあるもとは家けり
なとてかしかりにいかにもしる那
けふてさ侍く住む人のなとをいふなりや

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館